

ジャーナリズムのなかの文学

——村井弦斎『日の出島』とその読者——

関

肇

村井弦斎が『日の出島』を『報知新聞』に連載して好評を博しつつあった明治三十三年十月、『帝国文学』に「弦斎居士」と題して次のような雑報が掲げられた。

批評家の口頭にのぼること稀なれど、現今の読書社会に隠然勢力を占むるものは、講談物と弦斎の小説となるべし。地方行の新聞の重に報知なると、居士の小説あるがために報知の売口よきとを知らば、思半に過ぎん。決して、地方人士日常の話頭『日の出島』に限らるゝのみならず、都下に於てすら弦斎物といへば、評判悪き方にあらざるを聞かば、尚更一驚を喫するの外なかるべし。講談と弦斎物、共に趣味の高下を問ふに由なし。吾国民が如此の作を歓迎する間は明治文学も万々歳なる哉。

ここではアイロニーに満ちた表現を通して、『日の出島』が、新聞というメディアによって中央から地方まで「現今の読書社会」に幅広く浸透していることへの慨嘆と、それを凌駕するすぐれた小説がなかなか現れないことへの強い苛立ちが示されている。この雑報記者のポジションが、文学の「趣味」の高級性を自明の前提とし、新聞小説とそれを読む一般読者の低級性を見下ろす高みにあることは疑いない。こうした一般読者と文学読者の関係は、有名なA・テイボーデの「レクトウール」(lecteur)と「リスール」(liseur)の定義にはば重ねることができる。⁽¹⁾

それによれば、「小説といえは何でも手当り次第に読み、《趣味》という言葉の中に包含される内的、外的のいかなる要素によっても導かれていない人」が「^レ普通読者」であり、彼らは「大部分は新聞読者と一つになって入れ交っている」とされる。これに対して、「文学というものが仮の娯楽としてでなく本質的な目的として実在する世界」において選ばれている存在が「^リ精読者」である。そしてティボーデは、「^レレクトウール」とは一線を画する「^リズール」に、小説の読者としての正統性を見出している。

しかし、はたして「^リズール」には、新聞小説とその読者について裁断を下す権利があるのだろうか。テキストを読む権利の正統性を批判的に問題にした岡真理氏は、「テキストをめぐる問いとはおそらく、そこに何が書かれているか、ではない。そう問う前に私たちは問わねばならない。それは誰に向けて語りかけているのかと。(中略) 私たちがもしもテキストの宛先ではなかったなら、自らを宛先だと信じて、テキストに対してあたかも正当な権利を有するかのように振る舞う私たちの振る舞いも、自ずと異なったものにならざるを得ないだろう。私たちはもしかしたら、テキストに対して正統な権利をもたない『^二級読者』 the second readerであるかもしれないのだ」と論じている。⁽²⁾ そうだとするなら、新聞小説としての『日の出島』は、「^リズール」の横領にまかせるのではなく、その本来の宛先としての「^レレクトウール」へと送り返されなければならない。本稿は、そのためのひとつの試みである。

一

『日の出島』の『報知新聞』への連載は、日清戦争終結の翌年にはじまり、足かけ六年、約千二百回におよんだ。その掲載状況と単行本化の概要は次のようになる。

〈新聞初出〉

〈単行本〉(春陽堂発行)

「日の出島」

明29・7・8・11・10

明30・5刊(蓬萊の巻)

明29・11・11・30・3・13

明30・8刊(鶴亀の巻)

明30・3・14・7・17

明30・10刊(高砂の巻)

明30・7・18・11・12

明31・1刊(住の江の巻)

明30・11・13・31・3・13

明31・7刊(富士の巻)

明31・3・15・6・12

明31・10刊(新高の巻)

「日の出島 老松の巻」

明32・1・5・4・15

明32・7刊

「日の出島 白髪巻の巻」

明32・4・25・8・16

明33・1刊

「日の出島 東雲の巻」

明32・8・30・12・23

明33・6刊

「日の出島 曙の巻」

明33・8・14・12・27

明34・10刊(上・下)

「日の出島 朝日の巻」

明34・1・3・4・21

明35・8刊(上)、同・10刊(下)

この「日の出島」というタイトルが、いわゆる日出づる国としての日本、そしてその資本主義形成期の日の出の勢いを意味することは言うまでもない。当時の社会状況は、日清戦争後の好景気に支えられ、経済界は企業熱に沸き、二十世紀にさしかかった西欧からは新しい文明が移入されつつあった。そうした向日性の傾向が、タイトルには樂觀的すぎるほど全面的に打ち出されている。

さて、この小説は、『報知新聞』の紙面においてどのように配置されていたのだろうか。第一回が掲げられた明治二十九年七月八日の同紙を見ると、当時の紙面は六頁立ての六段組で、『日の出島』はその第一面の下段に大きな挿絵入りで掲載されている。挿絵を担当したのは、鈴木華邨であった。そして同じ第二面上段には、前月十五日に発生した三陸大津波の被害に関する社告「三県下遭難孤児救育義捐金募集」があり、続いて雑報として、自らの所有する小蒸汽船で日本

を漫遊中のイギリス人富豪の談話「極楽船（三）」や本郷の養育院を紹介する「福田会育兒院（六）」という記事が並んでいる。さらに注目されるのは、欄外に大きな活字で組まれた次のような惹句が躍っていることである。

●注意 報知新聞は独立独行不偏不党の高等絵入新聞なり毎水土曜両日に小説冊子を附録とす（一ヶ月代価三十銭）

こうした「独立独行不偏不党の高等絵入新聞」を標榜する編集方針は、明治二十七年十二月に『報知新聞』が『郵便報知新聞』（明治五年創刊）を改題するかたちで再出発し、それまでの路線を全面的に転換して以来、強力に推し進められてきたものであった。

前身の『郵便報知新聞』というメディアが、かつて盛んに自由民権派の言論活動を展開し、改進黨系の機関紙的な存在となっていたことはよく知られている。同紙は、明治二十年代初頭に当時の社長矢野龍溪による記事の平易化や報道力の強化、小説欄「報知叢談」の創設など紙面の改良を行い、勢力の拡大に努めたが、基本的には政論中心のいわゆる大新聞の姿勢を守っていた。しかし、国会開設後の政治熱の後退にともなって発行部数は落ち込み、さらに『国民新聞』（明治二十三年創刊）『万朝報』（明治二十五年創刊）『二六新報』（明治二十六年創刊）といった相次ぐ新聞の誕生に見られる新聞ジャーナリズムの成長が競争の激化をまねく中で、やがて経営難に追い込まれる。その危機を乗り越えるために、名称を『報知新聞』に改め、面目の一新が図られたのである。

当時の改題の辞には、その大新聞とも小新聞とも異なる自らの新たな立場が、「従来の大新聞と称するもの多くは主義偏僻にして文字佶屈、小新聞と称するものは多く主義野卑にして文字猥褻、前者は俗人に解し易からず、後者は士君子の家庭に入るべからず、今日の社会は実には中庸を得たる新聞を欠く、今報知新聞は其の中庸を行き最も平易にして最も高尚に最も正大にして最も普通なる新聞となれり」（明27・12・27、以下『報知新聞』からの引用は年月日のみを略記する）というように謳われている。つまり、大新聞と小新聞のそれぞれの弊害を取り除き、大新聞における「高等」なる品格と小新聞における「絵入新聞」としての分かりやすさを併せ持つことによって幅広い支持を集めることを目指したのであり、この紙

面改革にあたり編集総務となつて中心的な役割を果たしたのが、他ならぬ村井弦齋であつた。

弦齋は軍事小説「旭日桜」(明28・1・2・5・5)や「血の涙」(同6・19・9・3)、歴史小説「小弓御所」(同10・19・12・29)などを矢継ぎ早にその紙上に連載することになるが、同時に、「編集は一切村井弦齋総務の方寸に任せ」⁽³⁾られて有能なジャーナリストとして手腕を揮つた。とするなら、後に松居松翁(松葉)が、「最も人気ある小説家としての栄冠を得たに拘らず、その機敏にして聡明なる新聞記者たる才幹は、却つてその文名の圧力の為めに、十二分に社会から認められない姿のあつたのは遺憾な事である。愚老が親炙した最も大なる新聞記者は、氏と黒岩涙香氏とである」⁽⁴⁾と回想しているように、弦齋のジャーナリストとしての当時の活動を見過ごしてはならないだろう。

編集総務である弦齋が主導するかたちで刷新された『報知新聞』の紙面においては、記事や論説がルビ付き活字の平易なものとなり、挿絵入りの小説ばかりでなくその他の読み物も豊富に掲げ、明治二十九年十一月からは他紙に先駆けて講談を連載し、講談ブームを巻き起こすことになる。一方、報道活動は正確迅速が期され、政治や外交よりも商況や株式市況などの経済情報および三面記事に力点が置かれた。なかでも雑報には、艶種よりも犯罪や探訪などの警察種が多く取りあげられた。そして弦齋がもっとも積極的に取り組んだのが、家庭という領域の掘り起こしであつた。すなわち、「報知新聞は絵入通俗なれども決して卑猥なる記事無し王侯貴人の前に読んでも親子兄弟の前に読んでも決して顔を赤くする如き事無し、真に是れ家庭の良友、少年子女の好伴侶なり」(明28・3・28・29・6・19、欄外広告)という謳い文句のとおり、家庭向けの健全なメディアとすることによって、これまで新聞を読むことから排除される傾向にあつた女性や青少年を新しい読者層として開拓しようとするのである。そうした編集方針を受けて、明治三十年に最初の婦人記者である羽仁もと子が入社して家庭記事の充実に努めている。

また、弦齋の配下には、熊田葦城、篠田鉦造、田川大吉郎、松居松葉、岡鬼太郎といった記者たちが働き、次々に斬新な企画を手がけた。明治三十年四月には熊田により編集部内に「探偵部」が設立され、元刑事を雇つて事件などを独自に

取材したスクープで評判を集めることになる。翌年六月からは田川の発案で求人・求職の情報を紹介する「職業案内」欄が第一面に掲げられて、同紙の呼び物のひとつになっていく。読者の好奇心の充足や日常生活に密着した情報の提供などを通して、大衆化路線が展開されるのである。

こうした『報知新聞』の読者獲得の戦略は、一挙に成果を上げるものではなく、改題から数年間の発行部数は微増にとどまるが、明治三十年代初頭から着実な伸びを示しはじめる。『報知新聞小史』（昭11・6、報知新聞社）はその経緯を、「日清戦争から、戦後にかけて増加した発行部数は、いはゞ根柢の薄弱な増加で、やゝともすれば読者が動揺せんとしたが、本社が各種の新計画をたて、『家庭と新聞』を結びつけた結果は、遂に根柢の固き増加となり、『固定した読者』となるに至り、東京各新聞社中、発行部数常に第一たる地盤を確立することが出来たのである」と説明している。この背景には、教育の普及や交通機関の整備があり、それらにともなつて「一種の贅沢品視されてゐた新聞は、今や平生欠くことの出来ぬ『日用品』たる傾向を生ずるに至つた」という新聞に対する社会通念の変化があつたともされる。とはいえ、当時の新聞読者層は決して均質なものではなかつた。それは階層・職業・性別・学歴・地域等のさまざまな要因によつて不均質的に形成されていたことに注意したい。

山本武利氏は、明治後期の新聞読者層を各新聞の投書欄のデータをもとに詳細に分析している⁽⁵⁾。それによれば当時の『報知新聞』の読者層の特徴は、中小の商店主・番頭・商店小僧を中心とする商工読者およびその主婦や子ども・女中とというような家庭読者が多いところにある、学生や兵士にも読まれたが、知識人読者は少なかつた。こうした傾向は、たとえば『日の出島』とほぼ同時期に尾崎紅葉が『金色夜叉』（明30・1・1～35・5・11）を断続的に連載した『読売新聞』の読者層とは大きく異なっている。同紙は商工読者も少なくはないが、学生や教員を中心とした知識人読者の比率が高く、とくに文学愛好者に強く支持されていた⁽⁶⁾。これに對して、『報知新聞』は「新聞講談を愛読する教育水準の低い階層に多数の読者を見出してゐた」のであり、「学生読者の多くは中学生までであり、高校生や大学生は皆無に等しい」状況だっ

た。逆にだからこそ家庭に浸透して、潜在していた新しい読者層を掘り起こすことができたのである。

ここで『報知新聞』において比重の高い商工読者層が、当時の新聞読者層の全体から見てもっとも規模の大きな階層だったことは重要だろう。はじめ東京を基盤としていた同紙は、次第に地方読者にも受け容れられ、下層読者へも進出していった。明治三十年代には就学率が向上し、中等高等教育への学問熱が高まるとはいえ、知識人読者よりもますます肥大化していくのは、資本主義の発展を担う商工読者であり、あわせて下層読者も増加しつつあった。さらには家庭読者や地方読者が、新聞ジャーナリズムの拡張をもたらす重要な受け手となっていく。つまり、新聞読者層は裾野を広げるかたちで成長を遂げるのであり、『報知新聞』の読者たちは、その中核の一部を構成していたのである。彼らの大多数は、そのリテラシーがさほど高くなく、しかも必ずしも文学の読書に慣れ親しんでいるわけではない、いわゆる二級読者であった。そうした二級読者こそが、明治後期の新聞読者層の厚みを形成していた平均像であることは間違いない。

もちろんそれは、『報知新聞』にかぎったことではなかった。各紙とも当時の新聞読者層における社会階層の変動に対応するための紙面の改良にそれぞれ取り組み、『東京朝日新聞』や『中央新聞』をはじめ東京紙の多くが、競合する大衆化路線を辿っている。『報知新聞』が発行部数を飛躍的に伸ばすのは日露戦争後のことであって、明治三十年代前半には中間勢力の地位にあったにすぎない。しかし、その隆盛に向かう軌道が弦斎を中心にすでに早くから敷かれていったことも確かである。

ジャーナリスト兼新聞小説家である村井弦斎という存在は、文学と新聞メディアと読者のつながりや新聞小説のもつ意味を探るうえで、『報知新聞』を恰好の資料体としているといえる。弦斎は文学をいったいどのように捉えていたのだろうか。

『日の出島』というテキストには、文学や小説をめぐる論議が、作中人物の言葉に託していたところに示されている。⁽⁷⁾ その点では、小説のなかで小説の批評をするメタ小説であるともいえる。

文学を修めるならば一枝の筆を以て天下の人心を鼓舞する程の事業をし給へ、氣概が無ければ役に立たんよ、世道人心に関せずんば文字美と雖も取るに足らん、(『文学論』明29・8・14)

青年子弟が読んでも身の為めになり俗人が読んでも心得になると云ふ事を書いて人を誘掖し社会の利益になると云ふ心掛で無くてはならん、(『文学魔界』、明30・1・5)

いずれにおいても文学の本領は、読者との関わりで意味づけられ、その社会的な有用性が説かれる。すなわち、「青年子弟」や「俗人」といった幅広い多数の読者を想定し、「文学」は「天下の人心を鼓舞する程の事業」、「人を誘掖し社会の利益になる」ものでなければならぬというのである。一方、「世道人心」とは切り離された「文字美」の価値はまったく認められないわけではないが、美的なだけでは「文学」として「取るに足」りないとされる。

同様の主張は、『日の出島』の単行本第一巻「蓬萊の巻」(明30・5)の序文にも、「文を著して人を益する事無くんば是れ閑文字のみ。書を読んで自ら益する事を知らずんば是れ活書簞のみ。今世閑文字饒し活書簞たらざる者果して幾人」と唱えられている。こうした功利的な文学の主張が、かつて『郵便報知新聞』時代に『浮城物語』(原題「報知異聞」、明23・1・16、3・19)を連載して好評を博した矢野龍溪の系譜に連なるものであることは見易いだろう。

周知のとおり、『浮城物語』の発表をはさむ明治二十二年末から翌年にかけて、文学はいかにあるべきかをめぐって文学極衰論争が起きている。当時の人情小説の流行を「其文纖弱軟巧、絶えて雄厚絶大の象なし」(『文学極衰』、『女学雑誌』明22・12)と批判した島田三郎をはじめとする極衰論者たちに対して、石橋忍月や内田不知庵(魯庵)が強い反駁を加えたこ

の論争は、双方の文学理念の隔たりの大きさを浮き彫りにすることになった。極衰論者たちにとって「『文学』は経国の業を含めた学芸文事一般であり、〔結局彼らの『文学』を、多少の限定つきではあるが、啓蒙家の文学として総括することが許されるだろう〕⁽⁸⁾と越智治雄氏は指摘している。『浮城物語』は、そうした「啓蒙家の文学」を体現した小説として脚光を浴び、論争の焦点となっていく。その渦中に作者である龍溪は、「浮城物語立案の始末」(『国民新聞』明23・6・28 7・2)において、「読者に娯楽を与ふるは小説の正産物なり世を矯め俗を激し人を戒め時を諷するは是れその副産物なり」と述べ、「小説の本体」は「正産物」としての娯楽性と「副産物」としての実用性によって構成されとしているが、「彼の言う『副産物』こそが実は究極の目的であつた」⁽⁹⁾とするなら、その見方と弦斎が『日の出島』において表明した文学論とは、ほぼ軌を一にするといえる。

龍溪が『浮城物語』の「副産物」に挙げているものは、「日本の盛衰存亡は常に外より来るを知らしめ遠航貿易の務めざる可からざるを知らしめ海外の風土、人情、物産を知らしめ現世紀の兵器は理科学の所産なるを知らしめ理科学の貴むべきを知らしめ偉人傑士の風采を想望せしむる等」の多方面にわたり、小説の領分は広大であるべきことが説かれている。文学極衰論争ではその点をめぐって関心が集中し、物語の結構の「大」と人物の内面の「大」との是非が問われることになったが、さらに龍溪は、「浮城物語立案の始末」においてももうひとつの「大」を問題にしていることにも留意したい。それは、読者の範囲の「大」についてである。龍溪はこう説いている。

小説は広き世人を相手とす小説の優劣を鑑定するものは世上の読者なり作家の本意も亦た敢て一二の人を相手となすにあらず文学世界の数寄者のみに悦ばれんとするに非らず後世に知己を待つにもあらず唯だ現世の読者に娯楽を与へんと欲するのみ余の著の如く今日眼前に可成多量の副産物を攫まんと欲するものに在ては最も然らざるを得ず

ここで龍溪が小説は「世上の読者」に向けて書くべきことを強調し、「文学世界の数寄者」や「後世に知己を待つ」とを繰り返し否定したのは、人情小説を弁護する批評家の忍月や不知庵が、まさにそうした特定の読者を前提として立論

していたことに関わる。たとえば、「小説は美術的の文字たらざる可からず、『美』の約束を守らざるべからず」という立場の忍月は、「時人に愛好せらるゝの書は名著にあらず永久固定千載の下に数多の知を得るものこそ、実に大傑作と言はんと欲す」（『報知異聞（矢野龍溪氏著）』、『国民之友』明23・4）とし、また「小説は一言すれば情外に物なし」（『浮城物語』を読む）、『国民新聞』明23・5・8（23）とする不知庵は、龍溪の読者論を批判し、「一度君地方に出で、世間の読者の如何なるかを観察すれば最大（此大は君が大にあらず）なる小説は世眼より超出したれば到底俗に容れられざるを悟らん。（中略）名篇傑作は大抵作者の死後に顕れしを知るべし」（『龍溪居士に質す』、同、明23・7・15（16）と主張している。つまり、文学極衰論争は、読者本位と作者本位、あるいは多数の一般読者^{レクトゥール}と選ばれた文学読者^{リズール}のどちらに基盤を置くべきか、という文学の領有権をめぐる対立でもあったのである^⑩。

弦斎の『日の出島』における文学論は、そうしたかつての龍溪の主張の焼き直し^⑩の域をほとんど出るものではない。しかし、時代のコンテキストの中で考えるとき、あえて弦斎が文学はいかにあるべきかを声高に論じなければならなかった必然性があることも確かだろう。日清戦争を画期として読者の範囲は急速に拡大し、人情小説もまた大きく変容を遂げ、それによって文学状況は新たな局面を迎えることになるからである。『日の出島』には、当時の文学に対する厳しい非難の言葉をしばしば見出すことができる。そこでは文学界は弊害に充ちた「魔界」であり、「三文文学者」が跋扈する世界とされる。たとえば、自称哲学者先生と呼ばれる作中人物は、次のように悲憤慷慨している。

今の文学者と称する先生達は不思議な事に国家の休戚を度外視するネ文学美術は独立するものとか何とか言つて乙に澄まして居るがよくあ、澄まされたものだネ、（中略）我邦の三文文学者流に至ては三国干渉が来ても驚くのでは無し、国が大濶歩し始めても悦ぶのでは無し、臥薪嘗胆とは昔の事で忠君愛国とは支那人の寝語だと思つて居る、実に気楽千万ではないか、（中略）苟も文学に志す者は世界に対する日本国と云ふ觀念を抱いて内にしては民心の腐敗せん事を防ぎ外にしては国運の益々隆盛ならん事を祈らねばならんのにやれ豆腐が転んだの菟弱が亡つたの男の恋が

何うしたの女の愛が斯うしたのと愚にも付かん事を言つて騒いで居るのは不思議だね、「文学魔界」、明30・1・5)

多分に誇張された激越な調子は割り引くとしても、この批判は決してたんなる放言ではない。ここで言及されている「文学美術は独立するものだ」という観念は、おそらく坪内逍遙の『小説神髓』(明18・9・19・4、松月堂)に由来するものに違いない。逍遙は「美術といへる者ハもとより実用の技にあらねバ只管人の心目を娛しましめて其妙神に入らんことを其『目的』とハなすべき筈なり」と、「実用」とは切り離された芸術そのものの自立性を説き、小説というジャンルを「文壇上の最大美術」と位置づけた。⁽¹⁾それは文学極衰論に反撃した忍月や不知庵が拠り所とした論理であり、いわゆる近代文学は、以後その流れにそつて展開していくことになるが、現実社会と文学界との乖離は、日清戦争後に一層深まりつつあった。そうした当面の問題を見きわめたくうえで、経世済民の文学の立場からそれを打破しようとするのである。

続いて自称哲学者先生は、坪内逍遙を評して、「今日の文学界に於て含蓄の最も饒^{おほ}き人」であり、「人間社会のコンモンセンスを持つて居られる」と語り、「魔界」に陥った他の文学者たちとは区別している。「人間社会のコンモンセンスへざる魔界文学者などが何うして人情などを解し得るものか、彼等の筆に上るものは人情にあらずして多は世態なり、それも世態を穿つの技倆ある者は稀にして世態を写すもの多く、写す者よりも世態を描く者亦た一層多しだテ」(坪内逍遙氏、明30・1・6)とされる。したがって、先の引用に「男の恋が何うしたの女の愛が斯うしたのと愚にも付かん事を言つて騒いで居る」とある「魔界文学者」たちによる同時代の恋愛小説への批判は、人情小説それ自体に向けられたものというよりも、その墮落によつてもたらされた帰結に対して行われていることが分かる。そして「彼等が美とする所は魔界だけの美であり、彼等が善とする所は魔界だけの善である、(中略)今の三文文学者流も社会の暗処計り書き度がつて更に優美とか高潔とか壮快とか豪宕とかと云ふ事を好まん」(前掲「文学魔界」とする批判が、当時の観念小説や悲惨小説を指し示していることは言うまでもない。

すでに述べたとおり、日清戦争前後には教育の普及によつてリテラシーが向上し、それにもなつて文学の読者が増加

した結果、新聞小説の隆盛や『文芸倶楽部』（明28・1創刊）や『新小説』（明29・7創刊）といった文芸雑誌の登場があり、新しい小説家たちを進出させた。その多くは、人情小説の流れをくむ硯友社系であった。彼らは観念小説や悲惨小説の試みを通して、社会の矛盾や暗黒面に迫り、一旦は小説の幅を広げたが、明治二十九年頃から恋愛や愛欲をモチーフとする小説が目立ち始める。たとえば江見水蔭の「泥水清水」（『文芸倶楽部』明29・4）、あるいは広津柳浪の「今戸心中」（同、明29・7）や「河内屋」（『新小説』明29・9）、小栗風葉の「寝白粉」（『文芸倶楽部』明29・9）などのように、そこに描かれたのは主として「狭斜の恋」や「一種常倫以外の恋愛」¹²（彙報「文学界」、『早稲田文学』明29・11）であった。それは小説の世界がますます狭隘化していったことの現れといえる。まもなく同時代の文学への不満は、社会小説の要求に結びついていくが、『早稲田文学』はこの動向を総括して、「社会小説の呼び声かく四方に響き渡るは、必ずしも故なきにあらず、蓋し現今の小説は作家が眼界狭く、閱歴に乏しきの結果、主題が或方面にのみ偏き過ぎたり、又その規模もいたく小也」（彙報「文学界」明30・2）と批判し、さらに翌年にも「文壇の不振」の原因を整理して、「現作家、殊に新進作家の短所」を、「彼等は広く社会を観察して、一切の事実を捕捉し、さて大帰納するの大規模なく、徒に偏狭なる己が小人生観を尺度として人事世相を律せんとはなさざるか」（同、明31・6）としている。いわば文学極衰的な状況が再来しつつあったのである。その過程で発表された弦斎の『日の出島』は、文学の自立性を確保しようとする文学者や批評家たちに対する、小説の効用を重視する「啓蒙家の文学」の抵抗の目論見であり、塚越和夫氏の言うとおり、「作者が『日の出島』に託した文学観そのものが、明治文学への意図的な反逆だった」¹³ことは間違いないだろう。

しかも、同じ時期に小説の有用性を主張したのは、弦斎ばかりではなかった。「啓蒙家の文学」を率先してきた矢野龍溪は、「今の文学社会に対する希望の一ヶ条」（『帝国文学』明28・12）で、あらためて功利的な文学観を展開している。ここで彼は、文学を料理の比喩を用いて説明する。料理には「味覚の快感」を満たすことだけでなく、「人体の滋養」を供給するという目的がある。同様に文学の目的は、「社会及び箇人に対して単に快樂のみならず、尚ほ更に他の利益をも加へ

収め」ることにある。その「利益」とは、「知識」を与えらるということであり、「歴史にせよ詩文にせよ、百般の事物ことに理学に就きて」は、もともと「我社会の知識が欠乏」している。ところが「理学思想」などの「知識」は、それ自体は無味乾燥なもので、一般社会に浸透させるのが容易でない。そこで「或る思想を面白く他人に注入するの技芸」である文学が、その力となるべきであるとされる。この見解は、先の「浮城物語立案の始末」と基本的にならわってはいないが、ここでは文学の領分の拡張につながる要素として「理学」を中心とする「知識」に重点が置かれているのが特徴的である。「知識」の欠乏した社会における文学の目的が、「読者の快楽」だけでないのは、「滋養に欠乏したる人間に対して滋養分に富める料理の必要」があるのに等しい。したがって、文学は「知識」に読者の興味を引きつけるために「平易軽妙」にして読者を倦ませず、「最も愉快に読了せしむべ」きではあっても、それはたんなる面白さで読者に媚びるのとは異なる、というのである。

また、翻案物の探偵小説で人気のあった黒岩涙香は、アフリカ探検を描いた小説「人外境」(『万朝報』明29・3・1、30・2・26、原作アドルフ・ベロー「黒いヴィーナス」)の訳載にあたつて発表した「凡例」(同、明29・3・7)の中で、やはり「學術上の理を布衍し応用して読者の智識を動さんとする者」としての「『智』に訴ふる分子の有る」小説の必要性を説いている。近代以前の小説は主に「氣」や「情」に訴えるものであつたのに対して、「小説の新領分を拓くかたちで、驚く可き波瀾を貌して人を激感せしめ悚動せしむるもの」である「『感』に訴ふる種類」が現れ、「従来余が訳したる西洋小説ハ多く此の『感』に訴ふる種類より選んできた。この他に「智」や「想」や「趣」といった要素があるが、なかでも「人の智の駭々として進み、學問の理の日々に新なる今の世なるを以て、小説も世と共に進まんと欲せば幾分か『智』に訴ふる分子の有るに如くハ莫かるべし」とされる。さらに、「新聞紙の続き物」は、「其の巧妙よりハ事実と事理とを尙ぶ可し」として、「架空無根の作り話」を退け、「飽くまで事實に憑拠して又事理の区域に合する者」を重視する姿勢を示している。

『日の出島』における自称哲学者先生の涙香についての評価は、「文学界には寂として音も無けれども人間社会を顧みれば涙香氏の探偵小説は嘖々として到る処に歓迎せられるネ、(中略)その文学界に声無きは氏の小説徹頭徹尾人間向きにして魔界向きならざる為めである」(『黒岩涙香氏』明30・1・10)と、きわめて高い。ただ、「人間並の感情を具へた人は誰も涙香氏の物を面白くないとは云ふまい、その代り面白いと云ふ事の外に如何なる長所ありや」という問いを發しているが、「智」によって小説の領分を開拓し、「巧妙よりハ事実と事理とを尚ぶ」ことを打ち出した涙香は、すでにその点を先取りしていたといえる。

これらの功利的な文学観の間には、娯楽性や実用性にどれくらいの比重を置くかで差異がないわけではない。しかし、ここではその共通性に注目しておきたい。弦斎、龍溪ならびに涙香は、いずれも新聞ジャーナリズムの中で文学活動を行っていた。そのことが彼らの文学観の基盤を形成し、相互に連関する考え方に至ったものではなかったか。

では、新聞小説としての『日の出島』には、どのような特質があるのだろうか。その物語世界を読み解いていくことにしよう。

三

約千二百回の連載という新聞小説史上の記録的な長さを誇る『日の出島』において、語られた出来事の集合としてのストーリーが、起伏の多い錯綜したものであるのとは裏腹に、物語の發展をつかさどるプロットは、かなり単純明快にできている。それは基本的に二つに分けられる。第一のプロットは、神戸の豪商宝田儀左衛門の一人娘お富の婿選びの物語である。義侠心に富んだ父の莫大な遺産を相続したばかりでなく、拔群の美貌と才知をも兼備する彼女は、父の志を継いで社会に貢献する大事業をする人を婿にしたいと考え、また世間の様子を見るために上京する。その結婚相手の候補者には、

お富の従兄で実業家の宝田文吉、青年政治家で伯爵の名計太郎、遺産を管理する執事小曾木小路の息子で苦学生の馨などが登場し、それぞれ能力を発揮していく。お富は誰を婿にすべきかに迷い、なかなか結婚が決まらないでいる。第二のプロットは、お富の資金援助にもとづく発明の物語である。彼女は才能のある科学者に研究費を出して発明を奨励する。やがて宝田文吉も発明奨励事業に乗り出し、お富は関東発明会、文吉は関西発明会を結成して競い合う。前者からは、石橋亘の太陽灯、馨少年の万能殺菌薬、ある軍人の屈折望遠鏡、後者からは、雲野上成の太陽熱などが相次いで発明されていく。

この二つのプロットが進行するのにしたがってさまざまな登場人物が配置されるわけで、その顔ぶれは多数におよび、にぎやかではある。だがその反面で、彼らはいちじるしく類型的であり、相互関係も簡潔に図式化されている。主人公のお富や結婚相手の候補者、発明に情熱を注ぐ科学者たちなどは、すべて穏健で善良な常識人であるのに対して、並はずれた傑物や畸人、あるいは狡猾佞悪な人物も少なくない。たとえば、醜貌で身体が肥大な傑女である雲岳女史は、主人公のお富と好対照をなし、郷里の資産家と結婚して、夫を連れて台湾に冒険旅行に出かけたり、男女交際奨励の事業、日露関係の緊迫に応じた女軍の編成、人道同盟会の結成などに活躍する。他にも生真面目な学究肌の石橋には猥雑で無教養なお金夫人、気弱な雲野には家付き娘で高慢な夫人が配され、お富や文吉の事業に立ちはだかる人物としては、悪徳商人の爪野焦蔵や奸智にたけた犬山吠^{ほゆる}などが設定されている。

『日の出島』の物語におけるこうした特徴は、読者の興味をつなぐための作者の配慮であるといえるだろう。主人公のお富が誰を婿に選ぶのか、あるいはどのようなものが発明され応用されていくのか、といったことに興味を抱きながら読者は物語を読み進める。一般に新聞小説の作者は、読者の興味を一方でかき立て、他方ではぐらかしながら誘導していくのであるが、物語があまり複雑になりすぎるなら、読者は理解するのに苦労して、途中で読むのを放棄してしまうかもしれない。だからといって、物語が単純すぎても、読者は退屈することになりかねない。読者の興味をつないでいくには、

このジレンマを解決することが求められるのであり、『日の出島』では、ストーリーの変化とプロットの明快さによってそれが果たされている。どんなにストーリーが入り組んでいても、基本的なプロットさえ明快であれば、物語を理解することは難しくないからである。同様の事情は、登場人物についても働いている。彼らが大勢かつ典型的であることは、バラエティーの豊かさと分かりやすさの要素とともに満たすことになる。

そしてこの新聞小説が、婿選びの物語と発明の物語を主軸としているのは、女性読者と男性読者の両方に受け容れられることをねらった戦略と考えることができる。一つの物語は、それぞれ多くの付随的な出来事や挿話をともなっている。前者に関しては、お富の結婚問題は遅々として進展しないが、それを代替するかたちで雲岳女史の結婚やお富を姉のように慕う石橋の妹お糸と幸福先生との結婚が成立し、あわせて石橋とお金夫人、雲野夫婦、邪悪な貸家持ちの渋井玄蔵とその虐げられた妻お花などの家庭生活が描かれる。また後者では、お富が旅行中に命を助けた静岡の清次郎による竹の繊維織物の発明、医学や理学の力で護身して行われる雲岳女史の台湾奥地探検、新薬発明後に兵役についた髻少年の軍隊生活、お富や雲岳女史らの太陽熱船での支那遠征などが用意されている。南洋航海の冒険物語である『浮城物語』の場合、龍溪は「其事柄たるや小説界最多数の愛読者たる女子には稍や不向きにして其境を専ら男子のみに限れり」（前掲「浮城物語立案の始末」）としていたが、弦斎の『日の出島』においては、婿選び物語系と発明物語系とを相互に絡み合わせることによって女性読者と男性読者をともに取り込もうとするのであり、そこに知識人の男性読者を主な対象とする政論中心の大新聞であった『郵便報知新聞』から女性読者をも視野に入れた『報知新聞』における大衆化路線への方角転換が介在しているはずである。その意味で、『報知新聞』の読者層が、『日の出島』という小説を作らせたのである⁽¹⁴⁾と捉えられるだろう。

さらに、読者への配慮は、物語を支える文体にも示されている。「弦斎居士の文平易婦人も読で興味を感じると雖も時に一道の靈意を表はす以て居士の理想を窺ふに足る（シルレル生）」といった読者の声が『報知新聞』（明32・2・5）の読

者欄「投書籠」にあるように、『日の出島』においては口語体の会話文が大半を占め、文語体による地の文は簡潔に切り詰められた平易な文体を基調としながらも、決して平板なわけではない。登場人物たちは途方もなく饒舌で、際限のない会話を繰り広げるが、その遣り取りは笑いや機知をふんだんに含む軽妙なものであり、地の文にも時折警句が折り込まれる。とりわけお金夫人と雲岳女史の発する言葉は生彩を放っている。粗野で容色も悪いが陽気で愛嬌あふれるお金夫人は、あけすけな言葉で人々の隠された本音を露呈させ、また肥大した体躯と並はずれた行動力を発揮する雲岳女史は、怪しげな漢語崩しの言葉を駆使して力まかせに動くことによって周囲を巻き込んでいく。彼女たちのユーモラスなキャラクターに応じた言葉とともに物語が展開していくことが、この小説のひとつの魅力になっていることは疑いない。その人気の高さは、「お金夫人の名、流行語ともなるとする勢すさまじきものなり」（『日の出島 高砂の巻』、『女学雑誌』明30・11）と報じられ、あるいは、「第一に活躍した雲岳女史は、大兵肥満のトテも愉快なる婦人で、読者にもっとも人気あり」、「当時世間で肥満した婦人を雲岳女史と言った位だ¹⁵」ともされる。

しかも、その登場人物たちの言葉を通して、面白さのうちに分かりやすく噛みくだいたかたちで有用性のある知識や教訓が伝達されていくのである。たとえば、女権拡張論者である雲岳女史は、自分の結婚に臨んで徹底的に因習を打ち破ろうとする。その獅子奮迅の活躍ぶりはきわめて滑稽に描かれるが、彼女は「エヘンと一声天井の蠅も落ちん計りの咳払いして徐ろに坐中を睥睨し」て大演説を行う。

元来結婚は人倫の大礼、是れ諸君も熟知せらる、所なるが或る点より観察すれば結婚は一家族が革新の大期限なり、即ち親子兄弟と称する血族の一団結中に新に異分子を加るものにして、一方にはその異分子より子孫を生じて新家族の基礎を開き一方には旧来の家族次第に離散消滅して譬へば人間の陳代謝を行ふが如し、然り而してその新家族の帝王たるものは何である、疑も無くその家の花嫁である、花嫁たるものは良人に対して将来の良夫人たり、子孫に対して将来の賢母たり、一の家庭を感化薫育して国家の為に偉人傑士をも作り出すべき一個の大勢力なれば之を迎ふ

るもの宜しく礼を尽して之を尊敬愛護すべきに世間の花嫁に対する待遇法は往々妾が意に充たざるものあり、今日の社会に於て花嫁たる名称は一の不幸慘憺たる境遇を暗示するなり、(中略) 苟も新家族の帝王となりて将来の家庭を左右すべき花嫁なるにそれを斯の如き不幸の地に置くは強健なる国民を作り出すべき所以にあらず、よしや世間の花嫁は如何なる境遇に陥ればとて少くとも妾一個は、即ち今日以後此の和田家将来の帝王たるべき雲岳女史は断乎として世間普通の花嫁視せらるゝを肯ぜざるなり、(「席上演説」明30・8・26)

引用したのは演説の冒頭の一節であり、続いて一家内の各人の権限を定めた家族憲法や家庭の不和の発生を防ぐための法律の制定といった条件を次々に提案して、大いに気焰をあげるのである。こうした女性の地位や家族関係の改良に関する意見は、開明的な婦人雑誌や家庭雑誌の主張に通じるが、ここには高名な学者や批評家の論説にありがちな肩肘張った生硬さはなく、雲岳女史の身ぶりや声の調子および聴衆たちの反応などの滑稽味あふれる現場の状況とともに呈示されている。熱弁をふるう彼女は、演説の合間に頻りに水を催促するが、奉公人たちは恐れて近づかず、花婿の和田源吉や満場の来客たちはただ呆氣にとられたり、眠りこけたりする。そのユーモアあふれる場面の中で展開されているからこそ、花嫁は「新家族の帝王」であるというような当時としてはかなり大胆な発言が、読者に了解しやすいものとなるのである。

したがって、雲岳女史の言葉が字義どおりに受け取られることはないにしても、何らかのかたちで読者の既成の価値観を刺激し、揺り動かすことにつながったのではないだろうか。ある女性読者は次のように述べている。

私は弦斎居士が一番大好でございます、弦斎居士のは誠に読んでをりまして、あゝ、為になると存じます時もございませう、お転婆な、言ふ譏があつても体育と言ふ以上は、遊泳や体操をやれなんと書いてございませう、はい始終『報知新聞』は取つてをります。『日の出島』はどうもよくまあ続きますが、本当に面白うございませう、あの雲

岳女史の言ふ事なんと言ふものは?⁽¹⁶⁾ (「文学局外観」のうち「某地方紳士の女」、『早稲田文学』明31・6、傍点引用者)

まさに面白くて為になるところに好きな理由があるとされるのであり、この小説の有用性が読者においても受け容れら

れていることがうかがえる。こうした読者の志向は、他の登場人物についても見出すことができる。後に馨少年は兵役につき、軍隊の生活事情を詳細に語るが、その頃の「投書籠」には、「▲日の出島の軍隊生活を読んで入営する我々は大に益する所あるべし日の出島万歳弦斎居士万歳有益なる報知新聞万歳（一新兵）」（明32・12・3）という男性読者の声が寄せられている。

しかも、読者の反応は、男性と女性の性差によって分かれるよりも、むしろ相互に絡まり合うものであることに注意する必要がある。『日の出島』は明治三十一年六月十二日に「（前編終）」とした後しばらく休載が続くが、その頃と同欄から、ある女性読者の声を聞いてみよう。

△謹で弦斎居士様へ申上げまゐらせ候御許様にはいかゞ遊して日之出島お休みになされ候や妾は寝ても寤めても不幸なるお花夫人死地に陥りし雲岳女史一行又名計太郎様や富子嬢糸子嬢貢馨様弟の行末又雲野学士及び某軍人の発明事業悉く案じられ候之れ妾一人のみならず報知愛読の方々の心は皆一つかと推せられ候何卒右の人々の未来を説明し下だされ度幾重にも念じ上げまゐらせ候（本郷にて秋葉女史）（明31・9・3）

ここで女性読者は、お富を中心とする婿選び物語系だけでなく、発明物語系にも関心を注ぐのである。「之れ妾一人のみならず報知愛読の方々の心は皆一つかと推せられ候」とあるように、それは『日の出島』を読むという体験を共有する多数の読者との連帯感にもとづいている。その連載中は、すべての読者が物語のごく限られた一部を毎日少しずつ読み進めていき、誰も物語の行く末を知る者はない、という新聞小説における独特の読書のあり方が、いわば性差の境界を越える読者共同体の意識を生み出すのであり、それによって読者の関心が拡大されていくのである。こうした事態は、女性読者とともに男性読者がしばしばお富その他の結婚問題のゆくえに深い関心を示していることから確かめられる。⁽¹⁷⁾

しかし、『日の出島』がもつ面白さとそれがもたらす有用性は、新聞小説という形式と不可分に結びついたものであつて、単行本化されたものにおいては必然的に減少することにならざるを得ない。同一の小説であるにもかかわらず、新聞

と単行本ではその享受のあり方が大きく異なり、双方の読者の間には決定的なズレが横たわっている。次に掲げるのは、単行本で全十三冊の『日の出島』を第一冊目から順番に読んだある読者が、第七冊目の巻末の余白に書き付けた偽らざる感想である。

蓬萊、鶴亀、高砂、住之江、富士、新高、老松と読み来りてこの小説の意のある所を疑ふ。構想上余りに不自然に歪曲多し。思ふに作者弦斎の脳中狂なるに非ざるか。⁽¹⁸⁾

ここでは小説とは本来始めから終わりへと切れ目なく連続する秩序をもたなければならないという前提のもとに、『日の出島』における一貫性の欠如が厳しく批判されている。確かにこの小説には、物語の完結に向かう整然とした脈絡や登場人物の性格の発展は見当たらない。すでに塚越和夫氏の指摘があるように、長大な脱線や逸脱的な挿話が目立ち、登場人物たちはいずれも類型的で、唐突な改心や変貌が起こったりする。⁽¹⁹⁾それは裏返して言えば、この小説が単行本を律するテキストの統一的な全体性とは無縁であり、ひたすら新聞というメディアに固有の条件に則って作りあげられたものであることを指し示している。そうだとすれば、テキストに一貫性を求める立場からは致命的と見える難点についても、別の見方が必要になるだろう。

単行本は始めから終わりへと時間軸にそった直線的な読書を持続的に行うことができるのに対して、新聞小説はその短い一節を一日ごとに中断をはさみながら読むことを強いられる。この新聞小説の存在形態の特異性をどのように処理するかは重要な問題であるが、『日の出島』においては新聞連載の一回ごとに小さなまとまりをつけ、それを緩やかにつないでいく方法がとられている。ひとつひとつの断片には見出しが付けられ、毎回ひとつの出来事や話題が繰り広げられる。それらは相互に緊密に結びついていくのではなく、ばらばらのまま隣接的に並び合っている。同時に語りの視点は一定ではなく、自在にさまざまな人物に移動しながら多元的に焦点化していく。その結果として物語世界はきわめて流動的で一貫性や統一性には欠けている反面、融通無碍な広がりを獲得することになる。したがって、読者はいつどこから読んでも

それなりに興味がもてるのである。

『日の出島』にしばしば見られる物語の脱線や逸脱的な挿話は、この断片を次々と連ねていく小説の方法を補強する機能を果たしていると考えられる。小説の中に入れ子型に組み込まれたそれには、お金夫人たちが見る芝居の「本脚日の出山」、自称哲学先生による文学に関する議論、馨少年の書いた小説「朝日丸」、雲野が横須賀に停泊中の軍艦富士を見物して繰り広げる長々とした解説、雲岳女史の台湾行で示される藤原基隆の伝記、無名園遊会の余興として演じられる講談「大力源八」などがあり、各々がある程度の独立性をもち、ジャンルも多様である。その異質な要素がいくつも混じり合うことによって物語を活性化し、ともすれば単調になりがちな傾向を抑えることができる。

もともと、こうした仕掛けの多くは、それ自体が長大なものであって、読者を退屈させるおそれもないわけではない。小説内では、「本脚日の出山」についてお金夫人が「ア、モー倦厭たく、糸ちゃん、ホントに妾は倦厭つちまつたのよ」と大きな欠伸を二つ三つしてケロリと眼を円くする」（『残る二幕』明29・11・10）し、自称哲学先生の文学論をさんざん聞かされた馨少年は「モー辛抱が出来ません」（『三文文学者』明30・1・13）とその場を退散したりする。それらは読者の声を代弁するものに他ならないが、逸脱した挿話の冗長さへの小説内における批判は、物語の弱みを隠蔽するのではなく、かえってあからさまにすることによって読者の不満を緩和する効果をもたらすだろう。

また、同時代評でも「弦斎に向つて素より人物を活写するの筆あるを望むべきにはあらねども、此小説中に見えたる人間の如きは、一人として人間らしきもの、なきも亦妙なり」（『日の出島（蓬萊の巻）』村井弦斎著 春陽堂発行）、『女学雑誌』明30・5）というように非難されてきた登場人物の造型についても、一日ごとに断続的に新聞小説を享受する読者は、その性格の発展を求めようとはしなかったに違いない。前述のとおり、『日の出島』はほとんどが口語体の会話文で成り立っており、滑稽に誇張された登場人物たちの発する生きのいい言葉が全編に飛び交っている。おそらくこの小説を読む楽しみのひとつは、そうした言葉そのものを味わうことにあったはずである。

物語の一貫性や登場人物の性格の発展とは、近代文学の支配的なイデオロギーにすぎない。とするなら、それに拘束されず、異質なジャンルの混交や断片的な物語によって織りなされ、さまざまな亀裂をはらんでいる『日の出島』は、あるいはもともとポストモダンな形式を体现しているといえるかもしれない。

ところで、新聞小説の特質は、テキストの内在的な要素だけに還元してしまつてはならないだろう。その発表媒体である新聞の紙面の中に定位するということが、新聞小説にとつていったいどのような意味をもつのか、といったテキストをめぐる外在的な要素についても分析する必要がある。

四

鶴見俊輔氏は、新聞小説と新聞の紙面との関わりを次のように論じ、『日の出島』を引き合いに出している⁽²⁰⁾。

新聞小説は、単行本としてよまれる小説とはちがう性格のものである。紙芝居が道端の芸術として、露地の地勢を活用しておこなわれる香具師の芸術であるのに似て、新聞小説は新聞を舞台として新聞の紙面にあるすべてを小道具として演じられる興行なのである。同時代の新聞の紙面全体と新聞小説の内容は、微妙な仕方だがいにまざりあつて、和音をつくりだす。だから、同時代の新聞紙面からひきはなされると、あれほどいきいきとしていた物語が急に色あせて見えてくる。おおあたりした村井弦斎の新聞小説『日の出島』も、一八九六年（明治二十九年）から一九〇一年にかけての『報知新聞』からひきはなされると、海の底からひきあげられた深海魚のようにぐにゃぐにゃになつてしまい、それじしんとしてつじつまのあわない物語となる。

新聞に掲げられた新聞小説は、それだけが単独に読まれるのではない。他の新聞記事や広告などと常に併読されていくものである。すなわち、新聞小説の外在的な特質は、新聞の紙面を構成する雑多な記事や広告との関係性の中に置かれてい

ることにあるといえる。それは新聞小説が一日ごとの断続的な読書にさらされている事態とともに、その表現を制約する要素にもなりかねない。しかし、『日の出島』においては逆にそれがポジティブに作用するものへと転化されているのであり、そこにこの小説のもうひとつの特徴がある。つまり、他の記事や広告と併せ読まれ、相互に協働ないし競合することによって、『日の出島』という新聞小説の面白さは増幅されるのである。

たとえば、連載開始から約二ヶ月半が経過した明治二十九年九月下旬頃からの『日の出島』には、石橋巨の両親が上京してお金夫人たちと浅草見物に出かけ、パノラマ館に入る場面がある。石橋の老翁が「婆さんや、凌雲閣は先に来た時見たから今日は一つ平壤のパノラマを見やう、此のパノラマは画師が自分で戦争を目撃^みて描いたのだから爾う云うのは世界中に無いと云ふ話だ、殊に小山正太郎と云ふのは工部大学校の出身で今では第一流の洋画家^{あぶらゑし}だ、外国人に向つても自慢の出来るパノラマだから先づ第一番に入場^{はい}つて見やう」(『浅草公園』明29・9・29)と解説まじりに言い出すのであり、続いて館内のパノラマの生彩ある光景が登場人物の会話を通して詳しく語られる。日本パノラマ館の画面が、この小山正太郎が描いた日清戦争における平壤の戦いのものに差し替えられたのは、これより半年前のことである。当時あらためて開館式が催され、新聞各紙の記者も招かれてそのパノラマ画を縦覧し、三面記事として取りあげた。一般公開がはじまると連日多くの入場者が詰めかける盛況ぶりを呈し、巷間の話題にのぼっていた。『日の出島』のパノラマ見物の一節は、ちょうどそれと呼応するかたちになっているのであり、平壤の戦いを描いたパノラマ画やその画家についての知識を盛り込んだ案内記事としての役目も果たしている。

また、翌三十年五月の連載においては、石橋夫婦が雲野夫婦の企てた理学士夫妻懇親会に招待される挿話があるが、ここでの余興として「改良落語」が演じられる。その演目は、一二三日の掲載分が「金本位」、二十五日は「葉煙草専売」、二十六日は「臥薪嘗胆」となっている。金融システムの安定を図る金本位制の導入、財源確保のための煙草専売、そして三国干渉による清国への遼東半島の返還の際に唱えられた「臥薪嘗胆」のスローガンなど、それらはいずれも日清戦争後

の国家経営に関わる問題であり、この時期の新聞の経済面や政治面を盛んににぎわしていたものであった。なかでも葉煙草専売法は、同年三月二日に改正公布され、金本位制を確立させた貨幣法は、同月二十九日に公布されている。それらのまだ記憶に新しい話題が、小説に取り込まれているのである。したがって、雑多な紙面の記事とともに新聞小説を読む読者にとって、『日の出島』の面白さは、小説それ自体が内包するものにとどまるわけではなく、現実社会のトピックスに対する日常的な関心に裏付けられたかたちでもたらされることになるだろう。

こうした新聞を構成する紙面全体と新聞小説との関係性に自覚的な姿勢は、すでに矢野龍溪が前掲「浮城物語立案の始末」において論じているところに通じるものであった。そこでは新聞の紙面とは無関係に展開される一般の新聞小説について、「新聞紙上小説欄内を取り除くの外全紙面の記事は皆騒々しき其日々々の出来事ならざるはなく何れを顧みるも皆切たり張たりの修羅場なり此の修羅場に隣りて忽ち小説の別天地を現出せんとす一方は熱の極なり一方は静の極なり随分調子の合ひ難きものとす。(中略)其難渋知るべきのみ」とされ、「故に従来の経験に徴するに結構の大なる小説ほど其の調子に見栄あり局面の小なる者ほど其調子に見栄なし是れ亦た勢の免れざる所余の浮城物語は成る可く新聞紙と調子を協へしめんことを心懸けたり」と説かれている。すなわち、「騒々しき其日々々の出来事」を報じた新聞記事と新聞小説とのつながりを、龍溪は「調子」という微妙なレベルで考えているのだが、弦斎は『日の出島』においてさらにそれを個々の出来事のレベルにまで突き詰めていくのである。それは当時の新聞小説の方法としては他に類のない独自の試みであり、文学とジャーナリズムとが複雑に交差する領域を出現させるのに成功している。

新聞の紙面全体との関係を積極的に利用していく方法は、『日の出島』のいたるところに見出すことができる。物語の一貫性からは逸脱した、横須賀港での富士艦見物における雲野の長々しい解説や雲岳女史一行の台湾奥地探検も、実は新聞のニュースと深く関わっている。最新鋭の性能と偉容を誇る軍艦富士は、小説で紹介される一ヶ月ほど前の明治三十一年十月三十一日、横須賀に到着したばかりであった。『報知新聞』では、その着港の数日前から現地における盛大な歓迎

の準備を伝え、当日は富士艦全図や艦長の肖像等の写真版を附録に添え、特集記事を組むなど、連日大きく取りあげた。また、日清戦争の講和条約で割譲を受けて植民地となった台湾は、住民の抵抗をなかなか鎮圧しきれず、その新領土の統治政策への批判や異質な風土・生活・教育・言語等の問題が、新聞の紙面をにぎわしていた。雲岳女史が台湾行にのぞむ直前の明治三十一年二月二十六日には、第四代台湾総督に児玉源太郎が就任、民政局長として衛生行政に精通した後藤新平を起用して、その異例な抜擢で植民地経営への関心を集めつつあった。そうした新聞の報道と地続きのかたちで物語は展開していくのであり、テクストの全体的な統一性の観点からすればどんなに「支離滅裂」⁽²¹⁾に見えとしても、その時代の中に生き、日々の新聞に連載されたこの小説の断片を一日ごとに読み進めつつあった読者は、それらの時事的な話題に即した物語を興味深く読むことができたと考えられる。先にふれた自称哲学者先生の文学論も、一見唐突ではあるが、明治三十年正月早々の紙面に掲載されており、それは新聞各紙で恒例となっていた年頭における文学界の昨年の回顧や新年の展望の記事を代替するものとして捉えることができるだろう。その他にも、関東一円を荒らし回った稲妻強盗(明32・2・14逮捕)、郵便料金や鉄道運賃の値上げ(明32・4・1実施)、ボーア戦争(明32・10・12開始)、北清事変における天津攻撃(明33・7・14陥落)ならび到北京攻撃(同8・15陥落)、東京商船学校の練習船月島丸の行方不明事件(明33・11・17沈没)といったニュースへの言及もあり、この小説と新聞記事との関わりは、社会・経済・政治・文学・外交・軍事など多方面にわたっている。

興味深いことに、こうした『日の出島』の方法に関して、つとに尾崎紅葉は一定の評価を示していた。彼は「元来新聞紙に小説は向かないのである」が、「併し已むを得ないといふなら、此所に一つ新聞小説といふものについて新案がある」として、次のように述べる。

それは弦斎氏の日の出島が、直ぐ其日の出来事を翌日の小説に香^{には}はすといふ程にしなくとも、新しい当時の出来事を持ッて来て、それを題にして筋を仕組み、半分は新聞、半分は小説といふやうにしたならば、種の尽きる気遣もなく、

至極面白からうと思ふ、何も際物だつて構ふことはない、講談などに比べれば、遙に此の方がよい、新聞小説はこんな風にしたいと思ふのだ云々、(「紅葉氏の新聞小説論」、『読売新聞』明32・2・13)

すなわち、「半分は新聞、半分は小説」とあるとおり、紅葉もまた新聞という時事的な報道のメディアとの連関に新聞小説のひとつの可能性を探ろうとしていたのである。

連載形式にもとづく新聞小説が、このようなジャーナリスティックな性格を発揮するためには、あらかじめ完結したかたちの構想や腹案を用意しておくのではなく、連載の過程において次々に生起する現実の事件や出来事に即して柔軟に物語を発展させることのできる余地がなければならない。それらの事態にいかに対応していくか、そしてそれをいかに巧みに物語の趣向に取り込んでいくか、そこに新聞小説の作者の手腕は大きく関わってくる。ときには作者の予想もしないアクシデントさえ発生しないともかぎらないが、その場合は即興的な機知を働かせることによって、読者の興味を喚起することも可能になる。そのような新聞小説は、完結した小宇宙を形成する閉じたテキストとは対極にある、かぎりなく時代や社会に開かれたテキストであるといえる。

『日の出島』においてそれを明瞭に示す一例としては、大磯に滞在中の作者が報知社に郵送した原稿を途中で紛失されるという出来事に端を発する一連のエピソードが挙げられる。それは「日の出島 曙の巻」を連載中の明治三十三年の末近く、物語では北清事変における支那情勢を視察にお富や雲岳女史が発見し、その留守をあずかる雲野夫婦の関係が修復されていく模様が描かれているところで起こった。おかげで『日の出島』は、数日間の休載を余儀なくされた。その後、連載が再開されるにあたっての作者の弁を次に掲げる。

弦斎曰く原稿十回郵送の途に行衛を失ふ雲岳女史を支那より呼返して通信大臣に談判せしめんと存ず、再度の執筆は節季の重荷、数日読者に負きしは咎の帰する所を知らず(「独り寝」前書き、明33・12・7)

まもなく物語はこの作者の言葉のとおり展開し、雲岳女史が急遽帰国することになる。その一応の理由は、支那から

郵送したはずのロシア政府の陰謀奸策を暴く証拠の秘密書類入りの郵便物が紛失してしまい、時の通信大臣である星亨に談判するためということになっている。ちょうどそれは現実の出来事としては、強引な政治力で知られた自由党の領袖星亨が、同派の東京市会議員汚職事件の責任を問われ、新聞メディアの激しい非難にあつて通信大臣を辞職に追い込まれようとしていた時期にあたる。星がついに辞表を提出したのは、同年十二月二十一日のことである。すると翌年正月から連載された『日の出島 朝日の巻』では、早速これを雲岳女史が日本に向かつて航海中の出来事とし、帰国直後に雲岳女史は「我が好敵手を失」ったことを惜しみ、星の人物を論じていく（「星亨」明34・1・5）。

ここでは現実と虚構、事実と物語の間に区別は存在しない。実際に作者の経験した不測の出来事が小説に組み込まれ、虚構の登場人物が実在する人物に働きかけようとしていたり、現実の社会の変化が登場人物の行動を決定づけたりしている。いわば『日の出島』においては、テキストの内部と外部の境界が侵犯され、物語と現実が混交する独自の世界を現出させているのである。

そのことは同時に、弦斎の別のテキストとの連関や読者との交流にもつながっている。『日の出島』の中で弦斎は、「桜の御所」（『都新聞』明27・1・2～5・10）や「通俗西郷隆盛一代記」（福良竹亭との共編、『報知新聞』附録、明30・11・3～33・6・25）などの自作の一節にしばしば言及したり、自らの別の小説中の人物を登場させたりする。それによって、まさしく「22」広告する小説」としての役割を果たすのであり、弦斎の数々の著作や『報知新聞』の愛読者たちを喜ばせることになるだろう。たとえば、雲岳女史は日露間の軍事的対立の高まりを受けて大日本帝国女子軍を編成するにいたるが、その応募者の一人に金石大尉未亡人の小雲女史がいる。彼女は弦斎の軍事小説『血の涙』の登場人物でもあった。これについて読者からは、「小説日の出島記事にて故金石大尉夫人に会合致すとは思はなかつた血の涙連載当時を思ふと暗涙（落第生）」という声が「投書籠」（明32・11・25）に寄せられている。同様に『日の出島』では、「報知新聞や時事新報が男子品行論を絶叫するのも無理は無い」（「猪一件」明32・7・9）、「斯う云ふ時は東京の報知社が遣つて居る安信所〔注、探偵部の後身〕

の様なものが此方にあると可いけれども仕方が無い」「好奇心」明34・4・16)といった言及を通して、『報知新聞』の宣伝に つとめてもいる。

さらに、読者の声は物語に反映されることもある。「▲弦斎居士閣下雲岳女史相変らず御盛なれど細烟女史の消息如何まさかに其名の如く消えもしまいに(待遠生)」「(投書籠)明33・9・22」という読者からの問い合わせに応えるかたちで、やがて小説には久しぶりに雲岳女史の下宿時代の同居人である細烟女史が登場する。そしてすっかり嘘つきになった彼女は、折しも嘘言禁制を綱領に掲げる人道同盟会を組織して活躍しつつある雲岳女史と対面することになる。また、この人道同盟会をめぐるのは、「▲雲岳女史よ御尋問致し度き件あり先年貴女等の御催しに掛る無名園遊会に於て余が講談をなしたる事あり其節余は『講談師見て来た様なうそをつき』の言を實行せり斯かる事あれば同盟会を除名せらるゝや否や(自称折學者)」(同、明34・1・21)と、登場人物に仮託された読者からの声を受けて、翌月の小説にその質問を物語世界内で起こったこととして引用し、「余りに意義を狭くすると今の社会に行はれんから過去の事を咎めはせんが」「(入会策)明34・2・17」云々という見解を示している。つまり、作者と読者のコミュニケーションの回路がテキストという場において開かれ、テキストの生産と享受の関係が一方的にあるのではなく、相互に折り重ねられているのである。

このように見るとき、村井弦斎の新聞小説『日の出島』とそれを享受する読者のあり方は、近代文学からはおよそ遠く離れたものであることが浮き彫りになってくる。同時代の文学状況の中で、この小説はほとんど黙殺されたばかりでなく、これまでの文学研究においてもまともに取りあげられることはきわめて稀であった。それは文学の芸術的な自立性が決定的に欠けていたからに他ならない。しかし、すべての物語は、文化や社会や歴史の中で構築されたものであり、言い換えれば物語に外部はないとするなら、『日の出島』は近代文学と文学研究という制度が排除してきた領域の大きさを鮮やかに指し示しているのではないだろうか。

注

- (1) 『小説の美学』（生島遼一訳、昭28・4、白水社）
- (2) 『「二級読者」あるいは『読むこと』の正統性について』（『思想』平10・4）
- (3) 篠田鉦造「報知の断面史」（『五十人の新聞人』所収、昭30・7、電通）
- (4) 「弦斎氏の諸作」（『明治大正文学全集』第15巻所収、昭5・12、春陽堂）
- (5) 『近代日本の新聞読者層』（昭56・6、法政大学出版局）
- (6) 『読売新聞』の読者と新聞小説との関わりについては、拙稿『金色夜叉』の受容とメディア・ミックス（小森陽一ほか編『メディア・表象・イデオロギー——明治三十年代の文化研究——』所収、平9・5、小沢書店）、同「新聞小説と挿絵——小杉天外『魔風恋風』を中心に——」（『光世界における作者と読者——』（『国語と国文学』平12・5）、同「新聞小説と挿絵——小杉天外『魔風恋風』を中心に——」（『光華女子大学日本語日本文学科編『日本文学と美術』所収、平13・3、和泉書院）を参照されたい。
- (7) 以下、『日の出島』の引用は新聞初出に拠り、連載各回に付された見出しを掲げる。なお、漢字は現在通行の字体に改め、振りがなは特殊なもの以外は省略し、明らかに誤植と判断されるものについては訂した。
- (8) 『浮城物語』とその周囲（『近代文学成立期の研究』所収、昭59・6、岩波書店）
- (9) 同前。
- (10) 柳田泉氏は「矢野龍溪の『浮城物語』について」（『政治小説研究』下巻所収、昭43・12、春秋社）において、龍溪が読者第一主義をとったのに対して、不知庵は「作者が主であり、読者は従である」としたことが、「両者の立場の根本的相違である」と論じている。
- (11) なお、逍遙は必ずしも小説の功利的な効用を認めなかったわけではない。『小説神髓』の「小説の裨益」の章で、「間接の裨益」として、「人の気格を高尚になす事」、「人を勸奨懲誡なす事」、「正史の補遺となる事」、「文学の師表となる事」を挙げている。
- (12) 同記事には「此に於てか一派の論者は、近時恋愛の題意が背倫にして不潔のもの多きを咎めて已まず」として、その是非を問う新聞雑誌の論調が紹介されている。

(13) 「日の出島」(『武蔵野女子大学紀要』平10・3)

(14) 高木健夫『新聞小説史 明治篇』(昭49・12、国書刊行会)。ただし、高木氏は『郵便報知新聞』と『報知新聞』の読者層を連続するものとしており、その間の亀裂に着目する本稿とは見方が異なる。

(15) 『増補改訂 日本文学大辞典』第六卷(新潮社、昭26・4)「日の出島」の項。執筆は高須芳次郎。

(16) ここで言及されている雲岳女史の言葉は、台湾への探検旅行で谷川に架けられた丸竹の橋から落ちて無事に助けられる場面に見える。以下に該当部分を掲げる。

妾は浜名湖畔に生れ、幼時は男児と交はりて常に水中に遊泳せり、当時是れ一の悪戯として幾度か父母の譴責を受けしが今に至りては妾の爲めに大効ありしを覚ゆ、由來我邦は海国なり、海国に生れたるものは男子と女子とを問はず、普通教育の一として必ず遊泳術を学ばしむべし、然るに世人往往水中の危険を説て最愛の子女を水辺に近づかしめざるは是れ其子を愛して却て其子に避難の術を教へざるなり、(『遊泳術』明31・5・1)

(17) 若干の例を挙げれば、『投書籠』には以下のような男性読者の声が掲げられている。

▲お富嬢未来の良人に就て昨夜我々三人大激論せり大方諸君の鑑定は如何(気がしれぬ)(明33・10・9)

▲気が知れぬ生君お富嬢にして若も馨少年を眼中に置かざりしならば疾くに宝田名計の両氏中その一と婚すべき筈あり嬢の処置此処に出です何時迄もその撰択を遅延するは心ひそかに少年の兵役満期を待つにあらずや▲よしお富嬢の心今は少年に専らならぬも少年の成功必らずや嬢を未来の妻として得るに至るべし(予言者少年保護生)(同10・13)

▲弦斎先生の腹えぐりに日の出島人物中夫婦定めの腹稿、馨少年と分捕支那美人、お富嬢と名計伯琴治善に復して宝田夫人、牛沼とお銀、犬山とお連共に善に教化され夫婦となるべし(当太郎)(明34・3・13)

(18) 国立国会図書館所蔵『日の出島 老松の巻』初版(明32・7)への書き込みによる。

(19) 注(12)に同じ。

(20) 「新聞小説論——高木健夫『新聞小説史稿』を読んで——」(『限界芸術論』所収、昭42・10、筑摩書房)

(21) 注(14)に同じ。

②② ジェニファー・A・ウィキ―『広告する小説』（富島美子訳、平8・5、国書刊行会）